

世界のメンタルヘルス向上へ向け 日本の果たす役割にこれからも期待



WHO(世界保健機関)精神保健・薬物乱用部長
Dr. Shekhar Saxena

世界保健機関は、人々の健康を守ることを目的に1948年に設立された国際連合機関であり、2013年5月に開催された第66回世界保健総会において、「包括的メンタルヘルスアクションプラン2013-2020」が採択されました。「メンタルヘルスなしに健康なし」を行動計画方針とし、mental well-beingの促進、精神障害の予防、ケアの提供、リハビリおよび人権擁護の促進、精神障害者の死亡率、罹患率、障害の低減を目標に掲げ、世界保健機関の全加盟国は目標達成を約束しました。その達成のために、各国は研究と活動において急速な発展を遂げる必要があり、日本もその役割を果たすことが求められているなか、国立精神・神経医療研究センターとその理事長である樋口輝彦先生による進展を、非常に嬉しく受け止めています。樋口先生の貢献が高く評価され、クレペリンゴールドメダルを受賞されたことを心よりお慶び申し上げます。

精神疾患を抱える方の安心に向けて さまざまな取り組みを進める



厚生労働省障害保健福祉部長 藤井康弘

精神科領域での研究で御功績が認められ、樋口理事長が国際的に高く評価されたということは、大変喜ばしく、意義の深いものと受け止めています。先生の御功績を十分踏まえ、今後とも、薬物療法、心理社会的療法など、個々の患者に提供される医療の質の向上とともに、症状等に応じて適切な治療および福祉サービスをうけることができ、精神疾患を抱える方が安心して暮らせるように、取り組んでまいります。

国が支援する海外の研究機関との 学術交流への評価をいただき、喜ばしい



厚生労働大臣政務官 高階恵美子

厚生労働省では、精神疾患や発達障害の克服および自殺・うつ病対策の推進のため、国立精神・神経医療研究センターにおける研究およびその運営の支援をはじめとしたさまざまな事業を展開しております。今回の受賞では、樋口先生ご自身の功績が評価されるとともに、国の支援による研究事業等の成果を基に長年取り組まれてきた海外の研究機関との学術交流についても評価されており、大変喜ばしく思っております。今後とも、政府として脳やこころの病気で苦しんでおられる方々の疾患の克服に向けた研究および対策を着実に推進するため、さまざまな支援をしていきたいと考えております。樋口先生、この度はまことにおめでとございました。

権威あるドイツ精神医学界から 我が国の精神医学の国際的貢献が認められた



日本精神神経学会理事長 武田正俊

日本精神神経学会は、質の高い精神科医の育成、精神医学の研究推進とともに、国際的な活動を展開しております。我が国の精神医学は、2002年の横浜での世界精神医学会総会の開催以来、脳と心のサイエンスの研究推進など、世界のなかで一定の役割を認められるようになりました。当学会は、本年6月の第111回学術総会において、再び世界精神医学会を開催し、世界の精神医学への貢献を果たします。Emil Kraepelinはドイツ精神医学の基礎を築き、アルツハイマー病を命名した人でもあります。樋口輝彦理事長の受賞は、ドイツ精神医学界から我が国の精神医学の国際的な貢献が認められたものであり、心からのお祝いを申し上げます。

Teruhiko Higuchi receives the Golden Kraepelin Medal

海外から見た日本の精神科医療 クレペリンゴールドメダル受賞に際して



独立行政法人国立精神・神経医療研究センター理事長

樋口輝彦先生

ひぐち・てるひこ
独立行政法人国立精神・神経医療研究センター理事長・総長。1972年、東京大学医学部卒業。東京大学医学部附属病院、埼玉医科大学、群馬大学医学部精神神経学教室、昭和大学藤が丘病院精神神経科教授、国立精神・神経センター国府台病院副院長、院長、国立精神・神経センター武蔵病院院長、同センター総長、2010年、独立行政法人国立精神・神経医療研究センター理事長・総長、現在に至る。日本学術会議連携会員。日本臨床精神神経薬理学会、日本うつ病学会、日本生物学的精神医学会、日本不安障害学会等の会員。専門は気分障害の薬理・生化学、臨床精神薬理、うつ病の臨床研究。

撮影=田実雄大

著名な研究者が受賞した 権威ある賞

2014年10月1日、独立行政法人国立精神・神経医療研究センター(NCNP)の樋口輝彦理事長が、日本人の科学者として初めて、クレペリンゴールドメダルを受賞しました。この賞は、ドイツのマックス・プランク精神医学研究所が、著名な科学者であるエミール・クレペリンを記念して

1928年に制定したもので、精神医学の基礎研究分野において顕著な業績を挙げた者に授与されます。1928年から2012年までの84年間に18名が受賞し、そのなかには現存在分析の創始者ビンスワングー(Binswanger, 1905-1966)、統合失調症の概念確立に貢献したクルト・シュナイダー(Kurt Schneider, 1906-1966)など著名な研究者が含まれています。本年は、樋口理事長をはじめ3人の科学者に贈られました。樋口理事長は、2003年よりマックス・プランク精神医学研究所の研究アドバイザーを務め、そして特にうつ病の神経内分泌学的研究の日独共同研究を進めるなど、マックス・プランク精神医学研究所とNCNPの交流および共同研究を推進しました。今回の樋口理事長の受賞は日本のみならず、アジアにおいても初めての受賞となります。

comment



日独両機関の関係者全員、日本の精神医学全体への評価

→ のたび、素晴らしい賞をいただいたことは光栄の極みです。これまでの受賞者は教科書に出てくるような科学者ばかりですから、驚くとともに、歴史に名を残す方々に名を連ねることに気恥ずかしさを感じています。この賞を制定したマックス・プランク精神医学研究所は、ドイツを代表する学術研究機関です。その所長をされていたフローリアン・ホルスバー氏とは、うつ病の研究を通じて知り合い、親交を深めてきましたが、同氏から数年前、明治時代に盛んであった日独の精神医学の交流の現代版を創設することを提案され、これに賛同した私は、協力して研究交流の仕組みづくりに取り組みました。私が理事長を務める独立行政法人国立精神・神経医療

研究センターは、研究所と病院が一体となって精神疾患や神経疾患などの病因解明や治療法の確立を図ることなどを使命とする機関です。2010年にマックス・プランク精神医学研究所との間で協定書を交わし、以来、交流と共同研究を進めてきました。この連携は多くのスタッフの力添えがなければ、実現できるものではありませんでした。今回の受賞は両機関の関係者全員、さらにいえば、日本の精神医学全体が評価されたものと受け止めています。また、政府をあげて「こころの健康」を政策課題として重視していることが、私たちの研究や治療の力強い後押しとなっています。このことに感謝申し上げます。

日本における精神科医療への取り組み

独立行政法人国立精神・神経医療研究センターの前身である国立精神・神経センターは、1986年に国立高度専門医療センター(ナショナルセンター)の一つとして、精神疾患、神経疾患、筋疾患および発達障害や、精神保健について、高度な診断・治療、調査・研究、技術者の研修等を行うことを目的に設立されました。2010年度には独立行政法人となり、産学連携による研究成果の実用化に向けた体制の整備、バイオバンク事業(各種疾患の生体試料の収集・保管)の立ち上げなど、病態解明や治療法開発に向けたさらなる取り組みを力強く進めています。

精神疾患の患者数は、近年、うつ病などの気分障害やアルツハイマー病などを中心に増加し、2011年の患者調査において320万人を超えました。精神疾患は、決してめずらしい疾患ではありません。厚生労働省では「みんなのメンタルヘルス総合サイト」などのウェブサイトを作成し、普及啓発に取り組み、各都道府県等においては、最初に診療することの多い一般医の診断・対応技術の向上を目的とした「かかりつけ医等心の健康対応力向上研修事業」を開始しております。また、うつ病の治療法として、薬物療法以外で効果のある認知行動療法の研修事業を実施しております。

(医政局医療経営支援課、障害保健福祉部精神・障害保健課)